The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	金史良における文学と政治
Author(s)	金, 碩照
Citation	大阪大学, 2005, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58789
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

氏　　名	金　碩熙
本籍（国籍）	
学位の種類	博士（言語文化学）
学位記番号	甲 第　５６　号
学位授与年月日	平成１７年９月２８日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当　課程博士
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻
学位論文題目	金史良における文学と政治
論文審査委員	主 査　教 授　尾 上 新太郎
	副 査　教 授　森 藤 一 史
	副 査　助教授　岸 田 文 隆
	副 査　教 授　米 井 力 也
	副 査　教 授　平 田 由 美

論文の内容要旨

金史良(1914－1950)は肯定的意味で「民族主義作家」として評価されてきた。彼の「民族主義」を修飾する言葉は「ヒューマニティ」であったが、「海軍行」「海が見える」等のルポはその「ヒューマニティ」を払拭させる。「海軍行」は日本帝国主義への強制的協力を表す代表的な文章であり、従軍記「海が見える」は北朝鮮への自発的な協力を表す代表的な文章である。しかしどちらもが「お国のために」すべてを捧げることを勧誘していた。こうした政治とのかかわりのために、金史良研究は「親日」議論と「民族主義」議論に分けられてきた。そしてその議論によって取り上げられる作品も異なっていた。評価者側のナショナリスティック・スタンス（nationalistic　stance）が作用していたのである。

金史良の「光の中に」時期の作品および評論は主に言語問題をテーマにしている。彼は朝鮮語を「アプリオリ（a priori）」と把握していた。「朝鮮文化風月録」等には「朝鮮語はぢきに滅びるに違ひないから、今のうちから朝鮮語で書くやうなことを止めて、内地語でかくやうにしなければならないといふことである。しかしこれは實際の問題としてできない相談と思ふ」と書いて「われわれは朝鮮語の感覺でのみ、うれしさを知り悲しみを覺え、怒りを感じてきた。勿論われわれの一部の者は内地語で自分の意志発表はできるであらう。しかし感覺と感情を無視した所に文学があるといふことをしらない」と打ち明けており、「われわれは今まで尚白い着物と自分の言葉を守って来た。それは寧ろ本能であった」と述べている。これはヘルダーが言語を「遺伝的なもの」、すなわち生まれつきのものとして考えられるのと似ている。「郷愁」の中には、金史良にとって「アプリオリ」として認識されてきた「自然さ」が転倒するような事件が表れている。それは主人公が思わず日本語で喋ってしまう場面（北海公園のエピソード）であるが、金史良自身の経験と

も考えられるこのエピソードの挿入は、朝鮮語を「アプリオリ」として認識していた金史良の危機意識を表している。

しかし「アプリオリ」とは本能を意味していおり、「自然さ」とは違うものである。言語や服等は見慣れてきた習慣であるだけで本能ではない。「自然さ」と「アプリオリ」の同一視によって本能視されたリベラルなナショナル・エモーション（national emotion）は、「郷愁」を転換点としてロマン的ナショナリズムへ変化した。

「郷愁」には金史良自身のナショナル・エモーションが直接的に表れている。ここで「金史良自身」といえるのは、「男」としての「力」を持っていた朝鮮の過去を回想する部分において、主人公と語り手の距離が狭くなり、作家自身が物語の内部に関与し密着しているからである。しかし「男」としての朝鮮の表象は歴史的過去のことであり、物語の現在は「女」として表象化されている。主人公の絃が北京の骨董品屋で高麗青磁と李朝白磁を見つけた時、弦は二つの磁器から「救い」を求める声を聞いた。この声は姉の「伽倻」の声として想像されるが、これは柳宗悦が「朝鮮を思ふ」「朝鮮の友に贈る書」等に朝鮮を「欠如」として表象化しているのと非常に似ている構図である。「郷愁」における現在の朝鮮の女性表象と過去の朝鮮の男性表象は「郷愁」以降の作品にもつがれる。「郷愁」において金史良にとっての「アプリオリ」の転倒とジェンダー表象は、金史良のナショナル・エモションの表現であった。

「海軍行」には日本の海軍が「美しい」存在として表現されており、その美しさの源は「力」であることが書かれている。「故郷」時代に朝鮮を女性として表象化したのとは対照的である。女性表象から男性表象への変化、「力」の「美しさ」への希望は「風霜時代」における金史良のナショナル・エモーション、すなわちナショナリズムの表現上の変化であるといえる。

金史良は「ドイツの愛国文学」に「ひたすら政治のために」書かれた「政治文学」は「俗物的」であると述べており、「ドイツの大戦文学」には「扇動的」愛国文学としてのナチス文学を批判している。しかし、金史良自身の文章（例えば「従軍記」）にもナチス文学なみの「扇動性」が表れる。

金史良は日本帝国主義への強制的協力ルポ「海軍行」において日本の海軍に「男」としての「美」を見つけたと表現しているが、その「男」としての「美」は「悲壮美」、すなわち「悲しみ」を伴う美しさであった。しかし北朝鮮で書かれた「動員作家の手帳」には、朝鮮の「青年」から「喜び」を感じたと書いてある。「わが国」（日本を意味する）、「わが朝鮮」（北朝鮮を意味する）という言葉からも感じられるように、「海軍行」と「動員作家の手帳」は、お国のためにすべてをつくすことを勧める内容、「男」としての国家メタファー等の側面で非常に似ているが、それぞれの主なイメージが「悲しさ」と「喜び」という相反される言葉で縮約されることから、金史良自身の立場の差異がわかる。

「光の中に」時代に「非政治的」文学を理想としていた金史良が、自ら「俗物的」といった「政治的」文学を志向するようになった。「親日」か「民族主義者」かの議論は実は金史良が抱えていたナショナリズムの両面であり、評価者のナショナリズムの反映でもあったのである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、朝鮮人作家・金史良（本名、金時昌。1914年－1950年）における、政治と文学の問題について考究したものである。

金史良は、1914年、日本統治下の平壌に生まれた。豊かな家庭に育った。両親の名前は分からないが、母親は、アメリカ式の教育を受けた人だったという。金史良は、4人兄弟の次男で、他に、姉が１人、妹が1人いた。母親と姉はキリスト教徒だったことが知られている。（本人もある程度、キリスト教の影響を受けたことが考えられる）。同地で、小・中学校時代を過ごし、その後、（旧制）佐賀高（文科）を経て、東京帝大文学部に学んだ。ハイネに関する卒業論文を提出し、1939年3月、同大学を卒業し、4月、朝鮮日報の記者になった。

同年、小説「光の中に」を発表した。今日の「在日」のアイデンティティー問題の見られる嚆矢とも言われる作品である。同小説は、翌４０年、芥川賞候補作に選ばれた。（ただし、受賞には至らなかった）。同年、小説「天馬」・小説「草深し」を発表した。

論者によれば、「光の中に」やこれらの作品において、金史良は、深く言語問題・民族問題について考え、悩んだ。金史良は、ア・プリオリなものとして、言語を捉えた。当然、朝鮮語こそが、金史良にとって、第一義的に言語だった。朝鮮語で書かないのなら、内面的な思考の展開、微妙な心の襞の表現は不可能と、金史良は考えた。また、民族も、そういう言語を基軸にして成立するものと考えた。

だが、当時、朝鮮は、日本の植民地であり、政治的理由から、日本語で作品を書くことを金史良は強いられた。だから、当時、金史良は、作家として、人間として、深く危機感をいだいていたのである。

「光の中に」と「天馬」は、日本植民地下の朝鮮人インテリ層に視点をおき、また、「草深し」は、同じく日本植民地下の朝鮮人庶民層に視点をおいて、それらの問題を扱ったものである。

以上は、論者の言うところに従ったものだが、当時の金史良の苦悩を理解する上で、説得力のある論述になっている。また、今日の私たちが、言語問題・民族問題を考える上で、寄与するところも少なくない。

論者は、民族主義の両義性に気付いている。とは、その限界、独善性・排他性にも気付いているということである。ただし、金史良は、その生涯を通して、結局、民族主義の外には出ることができなかったのである。そういう金史良の限界にも、本論は、及んでいる。論者の思考能力の確かさがうかがわれる。

1942年、金史良は、小説「郷愁」を発表した。この小説には、柳宗悦の影響があると言い、論者は、細かい作品分析を行っている。

柳宗悦は、当時の日本人としては、最も、朝鮮人乃至朝鮮文化に理解のあった人とされる。だが、柳宗悦は、朝鮮文化の独自性は肯定したが、朝鮮人の政治的独自性に対しては、否定的であった。これは、事実上、日本の植民地政策を肯定するものだった。

金史良は、この点、違った考えをもった。

金史良は、現実の朝鮮を、一般にしいたげられたものというイメージのある、女性をメタファーとして捉えた。同時に、過去の朝鮮を、男性をメタファーとして捉えた。そして、直前のことに関し、ロマンをいだいた。この過去の朝鮮を男性をメタファーとして捉えたという点は、その後の金史良の行動を理解する上で、大きな意味があると、論者は言う。

金史良は、1945年、解放前、民族主義の立場から、中国・延安に脱出し、朝鮮独立同盟軍に加わる。また、解放後は、北朝鮮において、民族主義の立場から、自民族たる朝鮮民族のための国家の建設・発展にまい進するのだが、その下地が、「郷愁」に見られると言うのである。（朝鮮民主主義人民共和国の建国は1948年）。このことは、「郷愁」の、細かい、丁寧な、慎重な読解を要することで、よく論者は、その任に耐えている。この点でも、高い評価が与えられる。

1943年、金史良は、ルポルタージュ・「海軍行」を発表した。これは、日本海軍の宣伝のためのものだった。また、解放後の1947年、「動員作家の手帳」を発表した。直前のものは、朝鮮民族のための国家建設を念頭においたものだが、両者に、「国のため」という考えが見られる。無論、前者の場合、「国」とは日本のことである。ということなら、金史良は、矛盾を犯していることになる。前者から、金史良の「親日」的思想を引き出すこともできる。

だが、論者は、細かく両者を読み解くことを通し、前者においては、金史良が、おのれの全身をかけて、「国のため」と言ったのではないとしている。一方、後者においては、おのれの全身をかけ、「国のため」尽くすことを、金史良は説いたと言うのである。論述は説得力のあるものである。

これまでの金史良研究には、解放前・解放後と二分して、そして、両者を切り離して、別々に研究・評価するという傾向があった。そこで、「親日」とか、民族主義者というレッテルが張られたのだった。

だが、本論の論者は、その点に鑑み、解放前・解放後を通して、一貫して、金史良を見ようと心がけている。１人の人間の理解・評価を、ある時代だけ取り上げ、そして、自分のいだく思想を規準にして評価するという愚を、論者は犯さない。これまでの金史良研究は、研究者の政治的立場を中心に据え、その上で、金史良を理解・評価するという傾向があった。これでは、対象の実像を正しく浮かび上がらせることはできないだろう。

論者は、極力、虚心坦懐に問題に当っている。自分の政治的立場など、無論、かかげずに。相手の立場を極力、尊重し、その気持をでき得る限り汲み、じっくり相手の言うことに耳を傾ける。こういう態度を、作品の読解等において、一所懸命、実行している。これは、他人を理解する上での基本だろう。

論者は、あくまで謙虚で、そういう自分の研究態度もまた、十全ではないのではないかという危惧を吐露している。

ただし、研究の結果は、一言で言うなら、金史良を民族主義者とするものだった。民族主義こそ、金史良が行き着いた最後の思想だった。また、ただし、このことは、解放前から考えられていたことなのである。このことを、論者は、金史良の解放前・解放後の諸作品を注意深く読み解くことで明らかにしている。

結論は、既成の研究のそれと、重なるといえば、重なるものである。だが、それらとは、研究の基本が正に違うのであり、本論の論者の、正当というべき研究のありようの帰結として、その結論があることに、私たち審査委員は、全員、高い評価を与える次第である。